
スモーキークォーツ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スモーキークオーツ

【Nコード】

N0130X

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

新宿の雑居ビルが立ち並ぶなか、佐木田英輔のスリーエス事務所がある。今日の依頼主は矢野久美だった。

「鉄骨の回廊」「雨にぬれた綿毛」の佐木田英輔シリーズ第三弾です。

登場人物の紹介

佐木田英輔

何でも引き受ける便利屋をスリーエス事務所を開いている。独身で女好きの四〇代後半。喫茶店梓には毎日通う。

久ちゃん

佐木田の一番のお得意客。気のいい四〇が目前のホステス。クリーニングの引き取りや寂しい時の相手など、何でも佐木田に電話する。

梓ママ

喫茶店梓のママ。

気立てがよくこの物語に出てくるみんなの胃袋を支えている。

佐木田に好意があるようなないような。

石上刑事

一人娘がいる愛妻家。梓の常連客。

テレビのタレントに似ていることから梓ママからは石ちゃんと呼ばれている。

藤原組長

大学出のインテリやくざ。だが、義理人情は厚く佐木田の話相手。梓の常連客。

プロローグ

新宿は夜になれば華やかな街に変わる。

さきたえいすけ

そんな歓楽街の少し奥まったところに佐木田英輔さきたえいすけのスリーエス事務所がある。便利屋なのだが、黒い裏稼業にも精通しているから、いろいろなところから依頼は来る。一番の依頼主は久ちゃん。

今日も佐木田は暇で朝からぼーっと過ごしていると久ちゃんから電話が入った。

「ねえ、英ちゃん、ちよつと来て」

「おー、いいとも」

喜んで出かける。

出かける前には栄養ドリンクを一本。

「うまい！」

久ちゃんは四〇が目の前。それでも、気立てのいいホステスだ。最近は少しふつくらしてきて本人はダイエットをするというばかりで、一つも長続きしない。だが痩せたホステスなんて面白くない。佐木田はトントンと足取りも軽く上がっていくと、久ちゃんが立っていた。

「おやおやお出迎えですか。さあさあ、部屋へ入りましょ。どこのマッサージしようかなあ」

「英ちゃんたら違うわよ」

「何を照れてるんだよ。ドリンクも飲んできたんだから」

佐木田は背中を押して部屋へ入る。

久ちゃんの丸い乳房にワンピースの開いた胸元から手を入れる。

「違うんだったら」

「何だよ、今日はいいいんだろ。それともアンネの日記か」

「もう、そんなふざけた話じゃないの」

嫌がるそぶりを見せながらも、体を触ることは許してくれる久ちゃん。

佐木田が久ちゃんを後ろから抱きながら尋ねてみる。

「ホントに仕事の話か」

「うん。うちのすみれちゃんから頼まれたの」

「ふーん」

そう言いながらも後ろから乳房を触る左手を休めない。右手はさらにショーツへと伸びていく。

「ちょっと、触られたら落ち着いて話ができないじゃない」

「ふんふん、そうなんだねえ、久ちゃんここは？」

「嫌だったらあ、英ちゃんたら」

そう言いながら振り向き、唇を塞ぐ。

ピンポーン。

「何だよ」

「忘れてた、すみれちゃんよ」

「後にしてもらおうよ。ホラ、俺だってこんなに」

「ダメ」

久ちゃんは立ちあがってドアへ向かう。

佐木田は思い切りテンションが下がって不機嫌そうに寝転がる。

入って来たのは、三〇くらいだろうか、痩せたホステスだった。

佐木田の好みではないが、顔立ちは整っており細面にショートの髪が余計に小顔に見せた。目は切れ長で日本的な美人だ。和服でも似

合いそうだ。

「こんにちは」

「あ、どうも。佐木田です」

「私、矢野花絵やのはなえです。店ではすみれって名前ですけど」

久ちゃんはキッチンに立ちコーヒーを入れている。

「私に何か用があるとか」

「ええ、佐木田さんのお力をお借りしたいんです。弟を見つけてください」

「捜索願は警察の方が早いかもしれませんよ」

「ええ、でも弟は死んだことになってるんです」

「は？」

矢野花絵には三歳下の弟正勝まさかつがいた。弟は高校卒業すると、姉のいる東京に来て働きた。初めは焼肉店の厨房に見習いとして入ったが、いつの間にか仕事が辛いとか言つて、パチンコ店、スナックというように落ち着かなかつた。だんだんと姉にも借金するようになり、四カ月前から行方も分からなくなつた。

最後に会つた時、真剣な表情でさらに二百万の借金を申し込んだ。今までで百四十五万貸していた。花絵にしてもそんなに金があるわけではなく、無理だと突っぱねると泣いてこつ言つたという。

「姉さん、この金がないと俺は殺されるかもしれない」

「一体何をしたの。誰に払う金なの」

「人を撥ねたんだ。それが社長の息子だった。でも、どう見てもあつちが飛び込んだできたんだ」

「交通事故なの？ その人は無事なの？」

「ああ、無事どころか酒も飲んでるよ。それなのに金を要求されてサラ金でも借りて今まで百五十万払つた。だけど、仕事ができないからつてさらに二百万。その親父が貸しビルも持つてるとかで。この間俺の勤めてる居酒屋にやつて来たんだ」

大事な息子に怪我をさせた上に、息子の仕事ができなくなつたからその保証金を出せというのだ。金はないから待つてくれるように頼むと、その社長は連れてきた男たちに店で暴れさせ、脅しを掛けたという。店長はすぐに正勝を辞めさせ、二度と来ないでくれと追い出されたというわけだ。

「それで、弟さんが死んだというのはどういうことですか」

「ええ、行方不明だからと警察に行きました。すると、一週間ほどして、警察から電話がかかつて来て焼身自殺した遺体が見つかつたつて」

着衣や、時計、靴、運転免許証も弟のものだったという。車のそばには遺書も残されていて弟の筆跡だつたそうだ。

差し出された遺書にはこう書いてあつた。

「姉さん、もう生きていくのが嫌になりました。ごめんなさい」
確かに弟の字だという。

「うーん、それなのに、生きてるといふのはどういふ根拠があつて」
「ええ、電話がかかつてきたんです。姉さんって」

「新聞にも出た後だったからおかしいと思つて、警察に行つたんです。でも、証拠がなくなしくもいたずら電話かもしれないと言われて」

だが、佐木田は首をかしげた。

もしも弟が死んでいないのなら、死んだのは誰なんだろうと。弟を生かしておく必要が誰にあるんだろう。弟の狂言なのか。

「お金はここに二十万あります。もし見つかったら、さらに二十万お支払いします。交通費など十万お渡しします。これで見つけてもらえませんか。貯金はこれしかないのです」

佐木田は花絵を見つめて、わかりましたと言つて受け取つた。

花絵が帰ると、久ちゃんがすり寄つて来た。

「英ちゃん、引きつけてくれてありがとう。続きする?」

「うーん、その気はなくなつた。金のために働くぞ。じゃな」

「意地悪」

佐木田はドアを閉めて、トントンと階段を下りて行つた。

第一章

佐木田が向かったのは藤原組長の事務所。

組長はこの裏社会にどっぷり漬かつてはいるが、昔堅気のやくざでいきつけの喫茶店「梓」の常連客だ。

ときどき情報を教えてくれるので、スリーエス事務所としては報酬を払わなければいけないくらいだが、そこはお互い大人の付き合いがあるとしたものだ。

「こんにちは、組長いる？」

「ああ、佐木田さん。組長は昨日から病院です」

答えたのは若頭の遠藤だ。

「どうしたんですか」

「盲腸ですよ。早く病院に行けばよかったのに我慢してしまって腹膜になりそうでしたよ」

「それは大変だったね、どこの病院？」

「あの高橋病院です」

「え？ あそこだけはイヤだって言ってたのに」

「ええ、でも、急だったんで仕方なしに」

高橋病院の院長は組長の同級生で、お互いが頭が悪いと悪態をつくほどの友だちなのだ。

「それで、いつ頃退院できるの？」

「院長は四日ほどという話でしたが、組長は保険で稼ぐって」

「ははは、流石によく考えてるなあ。じゃあ、面会はできるのかい？」

「ええ、明日なら」

「ありがとつ、明日花束を持って行くわ」

「ありがとつございませす」

事務所を出ようとしてふと引き返した佐木田。

「ねえ、この人知らない？」

花絵から預かった写真を見せた。

「若造ですね。なんかやらかしたんですか」

「うん、死んだことになってるんだけど」

「ということは生きてるってことですか」

「うん、そうらしい」

「うちの若いもんに当たってみましょうか」

「お願いできるかな」

「お安いご用ですよ」

佐木田は正勝の名前も後ろに書いて渡した。

事務所を出ると、梓に行った。まだ、朝から何も口に入れてはいなかった。

梓は挽きたてのコーヒーの匂いが店に充満していた。ママの梓は手際よく卵トーストを作っている。

「ママ、僕もモーニングちょうだい」

「ごめん、英ちゃん。今日はトーストがこれで最後なのよ」

「えーっ、僕の分取ってくれてないの」

佐木田は怒ったように言う。

「だって、大学生のアメフトクラブがいっぱいやって来てね。さっき帰っただけけどモーニングのお代わりってみんなが食べちゃって」「学生がこんな喫茶店に来ちゃ困る！ 一人一食だろっ、普通は！」

意味不明な事を言う佐木田。

すると、ママはこっそりクロワッサンを出した。

「これでもいいかしら、どうぞ」

「お、クロワッサンか」

途端に機嫌が直る佐木田。

「昨日、デパ地下で買ったのよ」

「コーヒーとゆで卵も差し出すママ。」

「野菜サラダも無くなったけど」

「いやあ、これだけで十分さ。ママは俺に惚れてるね」

それには答えず、洗い物をし始める。そこへえりちゃんが帰って

来た。このえりちゃんは先月から梓でバイトをしている女子大生。朝十一時までのバイトだ。モーニングを近くの店に届けに行っていたらしい。

「佐木田さん、おはようございます」

「お、えりちゃん、いつもいても可愛いねえ」

話は半分に聞いておきますと言われてしまった佐木田。ママは笑っている。

佐木田はコーヒーを飲み終わると、スリーエス事務所を開けた。

住宅兼事務所なので、いつでも開いていると言えばそうだが、一応気分的なものだ。

机には配ってと頼まれてるティッシュが山盛り。

これは梓の入り口にも置いてある。どこで配ろうと構わないのだ。隣のパチンコ屋にも置かせてもらってる。それで金を取るのかと言われそうだが、それでもいいのだ。サラ金のティッシュパーパーなんてそんなものだ。

ティッシュで思い切り涙をかむと、電話が鳴った。

「もしもし、スリーエス事務所です」

「あの、うちのミーコがいないのよ」

「ああ、寺田さん。また逃げましたか」

近くのばあさんの飼い猫だ。あちこちに子どもを作る浮気な猫だ。もともと野良猫だったものだから、ばあさんは飼い猫と違っていても、ミーコにしては全くその気はないのかもしれない。だが、この猫を見つけて連れて行くと一万円なのだ。高い料金設定は人を見て決める佐木田だ。このばあさんの頼み事は寺田宝石店に請求することになっている。嫁はエステ通いではあさんを疎んじて、もともとは同居していたのに別のマンションを借りたのだった。夫は若い妻に何も言えず、金で繋ぎとめてるようなものだ。だから、佐木田はこのばあさんの依頼は快く受け、金はしっかり受け取るのだ。

きつとあそこの公園だなど目星をつけて自転車で行く。

「いろいろな依頼を一手に引き受けるすごい腕だな」
自分で自分を褒めるしかない。

「ミーコ」

探しながら公園を見まわす。繁華街の公園なんて汚いものだ。あちらこちらに酔っぱらいのおう吐物があり、金の無い若者のコンドームが落ちてている。

「みゃー」

ミーコの声がある。

捨て猫を連れて歩くミーコ。オスなのにミーコと名付けられた猫は雌猫を連れて出てきた。

「おい、また相手が違っぞ」

「みゃー」

「くそ、この浮気猫め」

そう言いながら自転車のかごに乗せる。

持ってきたシーチキンの缶詰を開けて、雌猫に渡すとミーコがみゃーと鳴いた。まるで礼を言ってるようだ。

「ふーん、お前もいいところあるじゃん」

佐木田は寺田宝石店にはこの缶詰の値段を三千元と報告することに決めた。

第二章

翌日、寺田宝石店から電話があった。

「もしもし、佐木田さん、寺田です」

「はいどうも」

あの缶詰が高いつて言うのかなあと少し姿勢を正して、受話器を持ち換える。

「あの、母のことではなくて、頼みたいことがあるんですが」

「えっ、なんかあったんですか」

「ええ、ちよつと電話では」

「では、後で伺います」

そうか、宝石店の依頼ならかなりの料金が見込めるなと佐木田は取らぬ狸の皮算用だ。

すると、ケータイも鳴る。

「あの、矢野花絵です」

「あ、花絵さんですか。まだ、捜査中で」

「ええ、いいんです。私、明日から大阪へ行くので報告だけしておこうと思ひまして」

「あ、そうですか。旅行ですか」

「ええ、まあ」

「お気をつけて」

電話は切れた。別に放つてゐるわけではない。若頭にも頼んでいし、今日は居酒屋へも行く予定だった。だが、花絵は待っているんだろうなあと思うと、佐木田は腰をあげた。

まずは、寺田宝石店だ。

最近改装して若い子も入るようになった店だ。店内はブランドの宝石が主流だ。夜の蝶が旦那に買ってもらうことが多いから値段もなかなかハイレベル。かといつてお手頃の若向きのデザインも置いてある。寺田宝石店はこの不景気の中、結構儲かっているようだか

ら、あの男は経営手腕はなかなかのものかもしれない。

ガラス張りの大きなドアを開けると、紺の制服を着て白い手袋をした売り子が白髪のお紳士に金の大きなブローチを見せているところだった。

「いらつしやいませ」

寺田は佐木田を見ると、笑顔で近寄って来た。

「すみませんね、わざわざお越しただいて」

「いいえ、繁盛しているみたいですね」

「そんなことはありません」

そう言いながら佐木田を奥の部屋へ通した。

大理石の床に高そうなソファ、大きなサイドボードにはコレクシヨンの腕時計が並んでいる。

「ほう、ロレックスがいっぱいだな」

佐木田はこういうものには全く興味がなかったが、一応は羨ましいそぶりも見せる。

「実は家内が家を出まして」

「え、家出ということですか」

「まだ、そこまでは」

歯切れの悪い言葉だ。多分あの若い妻は男でもできたのだろう。

「いつからですか」

「昨日です」

「あ、それじゃ、まだわかりませんね。飲み過ぎてどこかのホテルに泊まってるかもしれないし」

「ええ、そういうことも考えられますが」

「でも、家出だと思つのですね」

佐木田は寺田の顔を見ながら聞いた。ときどきため息をつきながら話す寺田は、五十歳になって初めて結婚したのだった。結構女にはモテると思うが、縁がなかったのかそれとも世間体だけで結婚したのか。そう考えるのには噂があったからだ。寺田宝石店の息子は男好きだという噂。

必死になつて母親が見合いを勧めたが、どれも断つて困るという話は梓で聞いたことがあつた。

だが、結婚してからはあの奥さんと仲良くやってるから、男好きではなかつたのねとママも言つてたっけ。

ぼつつとそんなことを考えていると、寺田は立ち上がつて一枚の紙を出した。

「これ見てください」

それは妻からの離婚届だつた。

「もう判も押してます。でも、そんな話全く出たことがなかつたんです。信じられません」

「これはどこに？」

「家内のクローゼットの中に」

よく見ると、日付は書かれていない。ということはいつのことか分からないわけだ。

「奥さんの方にそんな気持ちがあつたということですかね。ちよつといろいろ調べるのに交通費と通信費用がかかります。その分は先に二十万預かります。雑費などもかかりますがいいですか。こういう調査は諸経費が随分と掛かりますけど」

すると、寺田は引き出しの中から百万の札束を出した。

「取りあえず、これだけ先にお渡しします」

佐木田はわかりましたと言つて懐に収めると宝石店を後にした。

これだから寺田宝石店とは縁が切れない。ミーコより難しい調査だが、何だかきな臭い匂いがすると感じていた。

次は居酒屋だつた。そこは正勝が働いていた場所だ。店内は大漁旗が飾られて魚のプラスチック模型があちらこちらからぶら下がり、若者が喜びそうな雰囲気だつた。値段は安く威勢のいい店員が大勢いた。

「店長はいますか」

席に座ると生ビールを頼みながら、佐木田は尋ねた。

「はい、何か御用ですか」

「ああ、ちょっと話があるんで呼んでくれるかな。それと、枝豆頂戴」

「はい、生一丁、枝豆一丁」

大きな声でカウンターに叫ぶ。そして、奥に入って行った。奥から少し胡散臭そうに佐木田を見る男がいる。

「あれが店長か」

佐木田は手を上げた。店長は仕方なくやって来た。

「いらっしやいませ。どういっご用でしょうか」

「バイトにいた矢野君、正勝君のことだけど」

「あの子はうちとはもう関わりがございません」

そう言って困ったように顔をしかめる。

「いやいや、違っんだ。いちゃもんを付けにきたんじゃないよ。お姉さんに頼まれたんだ」

「は？」

「矢野花絵さん。弟を探してほしっって」

「でも、あの子はこの前焼身自殺したとか」

「うん、らしいね。でも生きてるかもしれないんだ」

ぎょっとした表情で見つめる店長。ネームプレートには中田と書いてある。

「中田さん、矢野君と連絡した？」

「どうしてですか。死んだと聞いてから一切会ってませんよ」

「そうか、でも、忘れてるかもしれないじゃない。思い出したことあつたらここに連絡して」

そう言っつて佐木田はパソコンで作った名刺をを渡した。

「スリーエス事務所ですか」

「うん、僕が所長。まあ、僕しかいないんだけど」

そう言っつてビールをもう一杯と注文した。店長はじつと名刺を見ながら警察じゃないんですねと呟いた。

第三章

佐木田が居酒屋を出ると、すでにこの街は夜の華やかな顔になっていた。

若い女のミュールの音がせわしなく聞こえる。

若い男たちはコンパの帰りなのか、あちらこちらで女性に行こうよと声を掛けている。大体その中で無口な男が一人はいるもんだ。その男の周りには女子が集まる。不思議な光景だ。欲しがってるのは同じだが、声に出すか出さないかで信頼度が変わるのか。

事務所に戻ると、若頭の遠藤がやって来た。

「あ、どうも。佐木田さん、この前の写真だけど」

「ああ、遠藤さん。何か掴めましたか」

遠藤は派手なアロハに白いパンツ。金のネックレスがいかにも夜の帝王という感じだ。その赤いアロハのポケットから出した写真。

「え、この子の隣にいるのがさおりって子でね、その女の子と仲が良かったという話なんだ」

「さおりって、どこの店の子ですか」

「うん、海賊の家って知ってるでしょ」

「あの派手なソープ」

「そう、そこのご指名ナンバーワンの子」

「へえ、また後ろにやばいのがいそうだな」

「うん、このさおりと正勝がどうも付き合っていたらしいんだけど。金の無い正勝にムリだわ」

遠藤の話は分かりやすかった。正勝はさおりとできていたようだが、店での指名がナンバーワンとなれば、例の交通事故の怪しい親子が関わってきそうだな。

「その正勝の事故った相手は野沢良太のっていうらしいんですがね、そいつの話も聞いてませんか」

「それよ、その野沢の父親が地上げ屋で有名な野沢コーポレーション」

ンさ」

「ああ、あれですか」

評判がよくなって、藤原組長は大嫌いな奴だとなるべく関わりを持たないようにしているという。やくざの中でもよくない奴というのが気にかかるが。

「とんでもない野郎に引つかかったという話だな」

「それなら、そのさおりはソープに行けば会えるんですか」

「それが姿が見えないということで、野沢新太が探してるんだとよ。女と逃げるために死んだことにしたんじゃないかな」

駆け落ちか。

男の嫉妬ほど醜いものはないが、どうもその線が怪しいようだ。

さおりと正勝の接点とはどこからか。

遠藤に礼を言いながら、棚の奥から酒を一本取り出した。

「これ、この前貰ったもんだけど、どうぞ」

「いやいや、こんなことぐらいで貰っちゃ組長に叱られるよ」

「いいじゃないですか。貰いもので悪いけど」

にっこり笑って遠藤は受け取ると、事務所を出て行った。

花絵に電話をしたが、花絵の電話は電源が切れていた。

「大阪に行くって言ってたな」

さおりのことを聞いていないだろうか。聞いてみたいと思った。

僅かな光が見えてきたようだ。

事務所の窓から見ると、喫茶梓の光が見えた。

「まだ、開いてるのか。なんか食べに行こうか」

事務所のシャッターを閉めると、梓に向かった。

梓はママが一人で煙草を吸いながら、水割りを飲んでいた。

「どうしたんだい、こんな夜まで」

「うん、最近、経営が厳しくてね、ちよっと憂鬱になって」

「それで、一人で飲んでいたら、余計に店は傾くよ」

そう言われると、ママはおかしそうに笑った。

「英ちゃん、何飲む？」

「ビール」

「仕事はどうなの」

「繁盛してるぜ。寺田の奥さん、見たことないかい」

「あの若奥さん、そう言えばホテルの通販パーティーに来てたらしいわよ」

「いつのこと」

「昨日だと思うけど。うちにも葉書が来てた」

テレビの通販でおなじみの会社だ。宝石やファッション、靴に置物、何でもありそうだ。栄養食品、ダイエット器具まである。梓のママは最近、ウエストが細くなるというロープのようなものを四九〇〇円で買ったらしい。

「ママもよく買うの」

「うん、店が終わってから見れるものって、これぐらいよ。二四時間放送だから結構面白いのよ」

「そんなものかねえ。寺田の奥さんもこれのお得意さんってことか」

「うん、ここへ来る江田青果の奥さんが寺田さんを見たって言ってたもん」

「すごいねえ。みんな行ってるのか」

「それがね、寺田さんはブラックのカードで買いまくってたらしいの」

「ほう、ゴールドのさらに上か。金持ちだなあ」

「私も買いたいわ。英ちゃん、何か買って」

「僕を売るから買ってよ」

「いやよ、どうせみんなにそんなこと言ってるんでしょ」
酔ったママは魅力的だ。つついからかいたくなる。

肩に手を回そうとしたとき、ママはすっと立ち上がった。

「そうだ、英ちゃん。いいものがある」

「なんだよ、ママの方がいいのになあ」

冷蔵庫を覗きこんだママは小さな器を取り出した。

野沢菜だ。

「野沢菜茶漬け食べるでしょ」

「うまそうだな」

ママは手際よく作っていく。そこへ石上刑事がやって来た。

「二人だけで何してるんだい」

「あら、石ちゃんもたべるでしょ。お茶漬け」

「うまそうだな」

石上刑事もこの常連客だった。ぼつちやりしてテレビのタレントにそっくりだから石ちゃんと呼ばれていた。

佐木田はグラスを取って、石上にビールを注いだ。

「ちよつと聞いてほしいことがあるんだ、石ちゃんに」

「佐木田さんの話はいつも怖いよ」

石上は笑いながらビールを一息で飲み干した。

第四章

石上刑事と別れて事務所に戻ると、久ちゃんが青い顔して息を切らしてやって来た。

「英ちゃん！ いる？」

「なんだよ、そんな大声出して」

「今、うちの店に男が来て、すみれを出せって怒鳴ってるの。慌てて裏口から来た」

「よし」

佐木田はジャンパーを手に取ると、階段を駆け下りて久ちゃんの勤め先に走った。

フラワーガーデンという店は三百メートルほど先にある。少し安い感じのするテナントビルの二階で四人の女の子が働いている。雇われママは気風のいい五〇代。

若い男が二人でママを脅している。

佐木田が二人の前に立つと、上から下まで値踏みするかのように見る。

「おい、この間に入ってくるとはいい度胸じゃないか」

「ああ、僕はこの店の用心棒なんだよ」

「何だと、こんな痩せた用心棒がいたのか」

後ろから入って来た久ちゃんが怒鳴る。

「何言ってるのよ、この人は片っ端から投げ飛ばすほど強いだよ」

佐木田は思わず苦笑いしながら男たちに近づいた。

「あのね、どこの誰かさんは知らないけど、僕は佐木田英輔って言っただけで逃げも隠れもないよ」

すると、入口から藤原組の遠藤が入って来た。

「おや、にぎやかな店がどうしたんだい。静かじゃないか」

ビビったのか、若い男は若頭の遠藤を知っているようだ。

「あ、遠藤さん。どうも」

「どうしたんだ、お前たちはどこの組のもんだ」

「あ、いや、組ではありません」

「あ、なんたらコーポレーションの社員じゃないのか。その小指貰うことになるかもよ」

慌てる男たち。すぐむことも忘れて逃げて行った。

佐木田はどうもすみませんと遠藤に頭を下げた。

遠藤は隣の店のマージャン店で遊んでいたところ、佐木田や久ちやんが血相変えて入るのを入口から見たという。

「佐木田さんの腕に任せておいた方がいいかと思っただけだね」

「いやいや、どうも。用心棒なんて口から出まかせ言ったものだから、ぞつとしていたんです」

久ちやんもため息をつきながら、ママの方にもたれた。

「本当に殴られたらどうしようかって心配だったわ」

「よく言うよ。俺が殴られそうになることばかり言うから。久ちやん困るよ。それにしても花絵さんをどうするつもりなんだろう」

遠藤は佐木田の方を向いて花絵さんはどこにいるんだと尋ねた。

大阪へ行く話を聞いているが、店の者は誰も知らなかった。久ちやんでさえも聞いていないという。

佐木田は遠藤に一杯奢ると、久ちやんに花絵の住所を教えてもらった。

花絵が住んでいるのは飯田橋だった。

翌日、佐木田は飯田橋に向かった。

地下鉄の駅から十分ほど歩いてコンビニの角を曲がると、単身用マンションがある。その四階に住んでいるということだった。古いマンションは四階なのにエレベーターがない。階段を歩いて行くしかないのだ。昨日の遠藤と飲んだ酒が体を重くしていた。

矢野と小さく書かれたプラスチックのプレートが貼ってある。

呼び鈴を押す。いないはずだから押しても無駄とも思ったが、意外なことにドアが開いた。

中から出てきたのは若い女だった。

「誰？」

「あ、佐木田英輔と言います。矢野さんのお宅ですよ。」

「ええ、今いません」

すぐにドアを閉めようとする。靴のつま先を入れた佐木田。ドアが閉まらないことに恐怖の表情を見せる女。

「ねえ、警察を呼びますよ」

「その方がいいと思うよ。君、怖がってるから。僕は花絵さんから弟のことを調べてって頼まれたんだよ。ひよつとして、君はさおりさん？」

大きな目をますます大きくしてじつと佐木田を見つめる女。

やがて、ドアを開いて佐木田を中に入れた。

その部屋は綺麗に整頓されていて、女の一人暮らしらしく花も飾ってあった。

佐木田は自分が便利屋家業の事務所を開いていて、矢野花絵に頼まれた話をした。女はやはりさおりといい、ソープで働いていたと話した。正勝はどこにいるのかと尋ねたが、首を振って知らないと答えた。

「花絵さんは大阪なんだろう」

「ええ、まーちゃんが大阪で捕まったっていつから出かけて行った」

「そんな警察の話は聞いてないけどなあ」

「捕まったのは警察にじゃない」

そう言うときさおりは静かに立ち上がって、ファンシーケースを開けた。花絵の衣装がぶら下がってるが一番奥に一枚の上着が見えた。男物だ。

さおりはそれを取り出すと佐木田に見せた。

「見て」

差し出した服は少し硝煙の匂いがした。作業着のようでよく見ると、左の胸ポケットに穴が開いている。撃たれたのか。だが血が噴き出た様子もない。ただ、少しだけ裾に血がついていた。

「この服は正勝のか？」

頷くさおり。

「二人でいた大久保のアパートの入口にこれがノブにぶらさがっていて。まーちゃんが教えてくれていたお姉さんの所へ昨日来たの」

「正勝はどうした」

「それが待つても連絡が来なくて。そしたらお姉さんのケータイに大阪へ来いって。まーちゃんを預かってるから一人で来いって」

「誰からの電話だ」

激しく首を振るさおり。顔色が悪く血管が浮き出るような白い肌だ。

「君は何か食べているか」

「何も食べたくない」

佐木田は立ち上がると、冷蔵庫の中を覗いた。卵と醤油と花ガツオがある。炊飯器は昨日からそのままのようだ。釜に茶碗一杯程のご飯が残っていた。手際良く卵雑炊を作ると、さおりに差し出した。

「美味しそう」

「ああ、うまいよ。食べてごらん」

さおりはすすつと雑炊をすすると、笑顔になった。

「子どもができてるんだろ」

さおりの箸が止まった。

第五章

さおりはお腹をかばうようにして、佐木田を見つめた。

「今、どれぐらいなんだい」

「三カ月、悪阻がひどくて」

「まあ、ゆっくり食べて。何か食べないとお腹の子に障るよ」

「うん」

さおりは顔を上げて呟くように言った。

「まーちゃんは優しいから、こんな仕事をしている私にも普通の女の子として扱ってくれたの。仕事で知り合ったのに足を洗えって」
好きになったらそんなものだろう。正勝も若い男なんだから。

「でも、そんなことどうして分かったの。まだ、お腹も出てないのに」

「いや、その机の上の薬」

机の上に産婦人科の薬があった。

「ああ、なんだ。すごいって思ったのに」

「具合が悪いのか」

「あんまり食べられないし、悪阻がひどいから下腹が張って来ちゃって。流産しそうになって」

「ふーん、そうか。大事にしるよ」

「うん」

佐木田の言葉に笑顔で応えるさおり。

正勝の服を石上刑事に渡す事に決めた。自分だけでは手に負えない事件になりそうだと佐木田は考えた。一体どこへ行ったのか。この二人はどこにいたんだ。

拳銃の痕も出てきた以上、この血痕が正勝のものなら命を狙われることになっているようだ。

「焼身自殺なんてしてないんだな」

黙っているさおり。

「なんでそんなことを計画したんだ。誰の差し金だ」

さおりは窓のほうに顔を向けている。作った雑炊が冷めてしまっ
そうだ。

「まずは食べなよ」

「うん」

さおりは箸を進める。

女は強い。まだ、若いのに母親になったという意識からか、細い
体に何とかして育てようという意志が感じられる。さおりは食べ終
わるとほっと大きく息をした。

「花絵さんは一人で行ったのか」

「ううん」

首を振るさおり。大阪へ行くことを促す電話がかかって来たのだ。
そして、このマンションの下にタクシーが止まっていたという。中
には誰かいるようで花絵は後部座席の人と話をしてから乗ったとい
う。

「ここに君がいることは」

「誰も知らないはず。タクシーが来た時もお姉さんはすぐに下りて
行ったから」

さおりは疲れているようなので、佐木田は寝るように言うと、石
上という刑事以外は誰が来ても開けてはいけないと言った。

「警察に話したら、私たち捕まっちゃうの」

「今はとにかくゆっくり休め」

佐木田は正勝の服を手に取ると、部屋を後にした。さおりが部屋
のかぎを閉める音を聞くと足早に階段を下りた。

マンションを出ると、佐木田は石上に連絡した。

午前十一時ごろ、喫茶店梓には久しぶりに藤原組長がやってきた。
「あら、もういいの?」

ママが声を掛けた。組長は少し色が白くなっていて、どう見ても
静かな技術者のような雰囲気だ。とても組長には見えない。

「ええ、お久しぶり。このコーヒーが飲みたくてねえ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない」

「えりちゃんが水を入れて差し出す。」

「お待ちしました」

「おお、えりちゃん。もう、仕事は終わりかい」

「ええ、今から学校です。ごゆっくり」

バイト時間は午前中だけ。えりちゃんは大学の授業があるらしく、今日は荷物がいっぱいだった。

「何をそんなに持って行くんだい」

「今日はパソコンがいるの」

「そうか、大変だな」

「今度パソコンについて教えてください」

それには答えず、いっておいでと組長は優しく言った。えりちゃんが出ていくと、入れ違いに久ちゃんがやって来た。

「あら、珍しい。どうしたの」

「英ちゃんはまだ来てないの」

「ええ、今日はまだよ」

そう言うと久ちゃんはメモをママに渡した。そこにはケータイ番号が書いてある。

「ここに電話するように言うのね」

「ええ、さつき花絵さんから新しい番号だって、でもすぐ電話が切れて。話し中なのになんか嫌な予感がして」

「久ちゃんが電話したらいいのに。佐木田さんに」

「それがケータイ落としちゃって」

久ちゃんは防水になってないケータイをトイレに落とししたと言って、佐木田の電話番号がわからないと困っていた。

ママは自分のケータイを渡すと、佐木田の番号を見せた。

「ほら、これから掛けたらいいわ。急いだ方がいいから」

久ちゃんはあるがとうと言うと佐木田に連絡した。

「あ、英ちゃん、私。あのね……」

久ちゃんの話し方はやはり女の匂いがした。梓ママは二人が仲が
いいのは知っていたが、いざ、その電話の口のきき方に少しの嫉妬
を感じた。

そして、今日のモーニングは決して取っておいてやらないと心に
決めた。

残っていたパンを藤原組長に「おまけよ」と言って差し出した。

第六章

ここは大阪南港。

たくさんの倉庫群の一角に、野沢コーポレーションの倉庫があった。

夜の倉庫周辺は速さに浮かれた若者たちが走り回る。その中に高^た田^か雷^{らい}太^{たい}がいた。この男は高校生だったが、父親の借金による蒸発から母と姉と三人が残された。高校へ行く金は無くなり、姉は大学を辞めて夜の接客業についた。母親はビルの清掃業の口を見つけてきたが、慣れない仕事に病気になり寝たり起きたりの日々だ。

雷太は初めこそ真面目に定時制に通うと決めていたが、昼間の仕事の疲れや鬱憤からついに暴走族の友だちができた。オートバイは無いから乗せてもらうばかりだったが、ついに盗むことを覚悟して買った。それらは解体している部品は売り飛ばし、自分のバイクとして改造していった。

初めは五十そこだったバイクも、欲望が次から次へと浮かんで、いつの間にか二百五十を乗るようになっていた。ただし、それらは盗品をさばく輩から売り買いうるという悪の連鎖みたいなものだ。

ただの野次馬から今では盗品を扱う暴力団の下っ端となって働いているのだった。

夜の帳が下りるとぞろぞろ集まって走り回る。

「雷太、いい加減にしなさい。あんたも働いてここの家賃ぐらい入れてよ」

「うっせえな、俺は好きなように生きるんだよ」

「じゃ、ここから出ていきなよ。あんたを食べさせる理由はないよ」「毎日毎日小言ばかり言っな」

姉の五月はイライラしていた。自分ばかりが酔った男に体を触られながら飲めない酒を飲んでいるのに、この弟はそんな私に寄生しているのだと。昔はあんなに可愛かったのに、今ではどこで何をし

ているのか。あのバイクは盗品ではないのだろうか。

問い詰めてもへらへらするか、無視するか、弟はのらりくらりとかわすだけだ。この雰囲気はいつも飲みに来るやくざの男たちと似ている。

仲間も眉を抜いてる奴や、金髪で刺青をしているような、まともとは思えない野郎ばかりだ。最近ではこの五月にちよっかいを出す男もいる。

五月は背も高くスタイルがよく、ロングヘアが適度にカールしていて、雷太の自慢の姉貴だった。頭もよく文芸部の部長だったことからいろいろな高校の作品コンクールには名前を連ねる常勝者だった。大学も関西では名の通った私立に行ってたが、父親の会社が倒産したことで全てが台無しになった。母親はお嬢さんで育ったため、今まで勤めた経験もなく体も丈夫でなかった。強く生きると口では言ってもそうできずにいた。ついにはストレスからかつ病になったのだ。

「おい、雷太ー」

外から呼ぶ仲間。

「近所にみつともないから大声を出さないように言いなさいよ」
母親が寢床から言う。

五月は着替えて働きに行く準備をする。短い丈に思い切り胸の開いた赤いワンピース。赤いピンヒール。見事に着こなす。真っ赤な口紅を差すとエナメルのバッグを肩から下げてドアを開けた。

「いよっ、五月ちゃん。いいねえ」

口笛が響く中を睨みつけながら歩く五月。

その中でもひと際五月に熱い視線を送る男がいた。雷太に盗品の受け渡しを教えた平井新太郎だ。

五月の後姿を見送ると、雷太にこう言った。

「おい、雷太。この間のマフラーの金、もういいよ」

「えっ、くれるんですか」

「ああ、その代わりに、一度姉貴とデートさせろや」

雷太の顔が青ざめていく。

この男がデートだけで終わるわけがないことを知っていた。

以前、公園でデートしていた男女を見つけたとき、新太郎は男をいきなり殴り飛ばして、女を奪った。雷太は気を失った男から財布を抜き取り、新太郎の後を追った。

雷太は新太郎が見張っていると野沢コーポレーションの倉庫の前に立たされた。

中から聞こえる女の泣き声とときどき叩く平手の音。
うめくような声。

三十分ほど経つと、新太郎は出てきて雷太にもやれと言った。

倉庫の中には衣服を破られ放心状態の女。目には青いあざ。乳房には齒型があつた。下半身を手で隠すことも忘れるほど、女は汚されていた。血で汚れているショーツを渡すと、女はうつろな目で呟いた。

「一生忘れない。殺してやる」

それを聞くと、雷太は殺される前にこうしてやる、と狂気にも似た意識が生まれ女を倒した。

獣のように抱いて事を済ませると、女を置き去りにして二人は出て行った。翌日の新聞に何か出るかと思つたが一切出なかつた。縛り上げた男のことも書かれてはいなかつた。

女がどうなったのか、その後のことは一週間もしないうちに忘れてしまった。

そんな新太郎が五月に興味があるということは、あの光景が頭に浮かんでくる。

「新太郎さん、それはちょっと。姉貴も仕事あるし」

「何だよ、じゃ、マフラーの金二十万、明日までに届けるよ」

「そんな、あれは五万って話じゃ……」

「できねえよ、割り引くなんて。俺だって仕事なんだから」

新太郎の目が怪しく光る。

雷太は分かっていたはずだ。いつか、こんな仲間とつるんでいた

ら碌な事にはならないと。

だが、そんな雷太を楽しむように新太郎は言った。

「いいよ。五月ちゃんのデートは映画だけだからさ」

「ホントに映画だけですよ」

「ああ、仕方ねえな、弟分の姉貴なんだから」

雷太はホツとした顔を見せたが、新太郎は舌なめずりをしていた。

第七章

寺田祥子は中野のマンションにいた。

「いつまでもこんな関係続くわけないわ」

一時のきまぐれで付き合った中田宏。
居酒屋を経営している。

ふと、立ち寄ったジャズバーでばったり会った高校の同級生。

今は金持ちの綺麗な女。祥子は気が強く昔からはつきりと物を言うタイプの女だった。そこが魅力的で昔から男たちにモテていた。

今は宝石店の奥様になっているようだが、家庭生活が面白くないのかジャズバーで一人で酒を飲んでいた。

「お、祥子じゃないか」

「えっ、中田君じゃない」

久しぶりにクラスメートに会った懐かしさから話が弾んだ。

楽しくてつい誘ったが、祥子は積極的な女だった。シャワーを浴びていると中田の後ろから抱いて来る。

「おい、洗えないじゃないか」

「私がしてあげる」

祥子は石鹸をつけると中田の体に自分を押しつけてきた。

中田は結婚したことがあったが、何となくうまくいかなくなつて三年前に離婚した。二人が忙しかったからなのか、一緒にいることがほとんどなく、お互いがセックスにも興味をしめさなくなり自然消滅のような離婚だった。

だが、この祥子はどうだ。

夫がいるというのに、一人で酒を飲みしかもあつけらかなとしたセックスをする。その何とも言えない魅力に中田は惹かれた。気楽な不倫だと思っていた。それはお互いがわかつていたはずだ。

だが、それがずれたのはある男に見られたことだった。

矢野正勝だった。

正勝は車の当たり屋詐欺にあったようだった。店じまいをして帰る前に中田に話しかけてきた。

「店長、金を貸してください」

「もう、いい加減にしるよ、給料前借しただろっ」

「これで最後ですから」

「ムリだよ」

突っぱねたら正勝は思いがけないことを言った。

「分かりました。店長が付き合っている人、寺田宝石店の奥さんですよね」

中田はぎょつとした。

「お前、何をするつもりだ」

「いや、何でもないですけど。寺田宝石店の主人が知ったらただでは済まないんじゃないですか」

恐怖だった。中田は一瞬ひるんだ目をしたのだろう。

正勝は続けてこう言った。

「あと少しでも用立ててください」

正勝の眼は必死だった。どうも外に誰かいるのだろうか、時々入口の方を見る。

「これで終わりだ。明日からもう来るな」

そう言って握らせたのは二十万だ。

「ありがとうございます」

正勝はそう言うと、入口を出て誰かと話しているようだった。中田は不安だった。

いつ、また同じことを言っつてこの男が来るのではないかと。前掛けの紐を強く握りしめた。

居酒屋の明かりを消すと、祥子にメールをした。

「今すぐ会いたい」

この日の中田は変わっていた。

祥子は中田の眼が光っているのを認めると、少し微笑んだ。

「今日は獣の眼になってるのね」
すると、その言葉を言い終わらないうちに、中田は祥子の服をはぎ取った。

祥子の肩に齒を立てた。

荒くすればするほど、祥子は興味津々というそぶりを見せた。

舌なめずりをする祥子の顔は、まるで妖しい生き物のようだった。
夜の闇の中でうごめく二人。

息。

きしめくベッド。

粘着質の音。

うめき声。

時間は止まらない。

中田はその時思った。

地獄に落ちていく。

祥子は地獄の案内人か。

そう思いながらも体を離せない。

この手、この口、この秘部を知ったからには、もう二度と抜けられない。

そう思うと強く乳首を噛んだ。

悲鳴をあげながらも、祥子は止めてとは言わなかった。
「これを飲んで」

そう告げると、祥子は薬を二錠中田に口移しで渡した。
何分も経たないうちに、中田はよみがえってきた。

果てたはずの体に英気が漲る。

遠のく意識の中で、祥子が覆いかぶさって来る。
感じたことのない感覚。

全てが黒白の色の無い世界。

祥子の吐息が心地よく天国にいざなうようだ。

中田は呟いた。

「俺たちは落ちていく。地獄の底に」

祥子はよく分からないことを呟いている。

「あなたのものは私のもの。私の体は……」

朝になっても祥子は帰らなかった。

中田も起きられなかった。

「一体、あの薬はなんだよ」

「元気になる薬。一度試してみたかったの」

「ヤバいんじゃないか。麻薬じゃないのか」

「いいじゃない、一度くらいじゃ中毒にもならないわ」

祥子の言葉にそうだろうかと不安な気持ちを隠せなかったが、あの感覚を忘れることはできそうもなかった。

「ねえ、もう一回分残ってる」

そう言っていると祥子は、ベッドから起きあがりバッグから薬を取り出した。

「もうやめてお」

と言った言葉は祥子の唇に塞がれた。

第八章

中田はマンションから祥子が出ていくのを見送った。居酒屋を始めてからは止めていた煙草に火をつけた。祥子が置いていったものだ。

何だかふらふらする。

やり過ぎると世界が黄色になるって誰かが言ってたな。そんなことはないんだ。

ふと、可笑しくなった。笑うと煙が気管に入っつてむせてしまふ。久しぶりの煙草は美味しかった。

料理の味に響くと、今まで止めていた煙草。

「ただの居酒屋にそんなもの客は望んでないかもな」
何もかも鬱陶しい。

思い出すだけでも腹が立つ。あのときの正勝。誰が勤め先を世話してやったんだよ。

くそつ、人を脅すような真似をしゃがって。

中田は面白くなかった。

使ったティッシュが汚らしく散乱している部屋。

あいつがいると碌なことはない。

「誰かが殺してくれるといいのに」
ふと呟いて、自分でも驚いた。

慌てて煙草の火を消す。

人を殺すなんてこと、想像したこともなかった。

だが、二日続けて飲んだ薬のせいなのか、妙に自分が大きく見える。

才能が埋もれているように感じる。

社会はもつと俺を受け入れるべきだ。

不遜な考えが頭を占めていく。

小さな居酒屋で終わるような俺ではない。

大学のバイトが本業になっちまった。

あつという間に店長になり、大学は中退した。

学生相手やサラリーマン相手の店のノウハウを研究した。

どんなものを安く仕入れ、何が喜ばれるか。

だが、こここのところの不況で人は家路に着くようになった。

昔のように上司といやいや飲みに行くこともしないのか。

上司も部下も金もないのか。

そんな中、正勝は俺の車で仕入れに向かった。いつものように高い葉物野菜を少し遠いが埼玉で安く売ってくれる店を見つけた。

その帰り、野沢良太にぶつけたらしい。

信号のない交差点で二十キロ程度しか出していなかった。左折しようとしたときに走って渡ろうとしたのが良太が飛び出してきたのだ。

良太はボンネットにドンと乗ったという。

驚いた正勝は救急車を呼ぼうとしたが、そのとき良太は父を呼んでくれとケータイを渡した。

馴染の医師に運んでほしいと言われた。それから正勝の悪夢の始まりだった。

怪我のお陰で仕事ができないと言われ、金の請求が始まった。

初めは仕入れで頼んだという思いもあったが、店に変な男も来るようになった。

貸した金もきつと返っては来ないだろう。

膝を思い切り強く叩くと、中田は立ち上がった。

祥子は家に戻っていた。

「昨日はどうしたんだ」

「ほら、同窓会で会った友だちが離婚の危機なんだった。泣いて訴

えるからついつい聞いてあげていて」

「そんなときでも電話くらいできるだろう」

「メールしたわ」

そう言われ、ケータイを見ると確かにメールがあった。

怒りの矛先を持って行く場もなく、寺田は朝食を作ろうと立ち上がった。

「ねえ、私が淹れてあげるわ。コーヒー」

祥子はニコツと笑うと寺田の肩に手を置いて、エプロンをつけた。白のフリルのエプロンは祥子がつけると、妙に色っぽくなるのはなぜだろうか。清楚な雰囲気の代表みたいな白のエプロンなのに。卑猥なイメージが湧いてくる。

いい歳をした男がみつともなく嫉妬する。

本当はどこで誰と何をしていたんだ。

問い詰めたくなるような思いをぐつと堪えていた。

だが、祥子はそんな寺田をなだめるかのようにウエッジウッドのカップにブルーマウンテンのコーヒーをいれて差し出した。

「いい香りね」

「ああ」

カップを持つ寺田の人差し指を祥子が触れる。

「あなたの指は長くて素敵」

からめてくる指を払いのけることは到底できることではない。怒っていたのにもうそんなことはどうでもよくなってしまふ祥子の指「ねえ、お母さんのところへ何を持って行ったら喜ぶかしら」

冷たいようだが、祥子はよく考えてくれているんだ。寺田は祥子を抱きしめた。

「今は梨が出てきたから持って行ってよ」

「そうするわ」

祥子は笑いながらこう言った。

「あら、もうこんな時間よ。店を開けるんでしょ」

寺田は盛り上がった気持ちのやり場のなさにがっかりしたが、祥

子は「夜のお楽しみ」と耳元で囁いた。

「今度入荷したあのネックレス素敵ね」

「ああ、でもこの前買ってあげたばかりだからな」

「うーん、意地悪」

祥子はふくれっ面をして見せる。

祥子は確信していた。

きつと、今晚、あのペンダントを裸の私につけるはずだと。

寺田は店のシャッターを開けると、ダイヤのペンダントをショーケースから取り出した。

祥子の喜ぶ顔が見えるようだった。

そして、隣の薬局で値段の高いママシドリンクを買ってきた。

「あ、社長早いですね」

「うん、このペンダント。僕が買うよ」

「あら、また奥様ですか。羨ましいわ。そんなに愛されて」

店員はお世辞を言ってるだけだが、寺田は上機嫌に笑った。

第九章

久ちゃんから電話をもらった佐木田。

「嫌な予感がするのよ」

「いつのことなんだ」

「さつきよ。私に新しい番号を覚えてくれて。それで、店にもあなたを探しに人が来たって話していると突然切れて」

「おかしいな」

佐木田はさおりのことについても聞きたかった。

どの程度の知り合いなのか。弟の彼女を匿ったのはなぜだろうとか、聞きたいことが山ほどあった。弟の居場所もホントは知っているのではないか。

「英ちゃん、今晚来る？」

「うーん、これから大阪へ行く予定だ」

「花絵さんの居場所知ってるの？」

「いや、何も知らない」

「私も行く」

「は？ 遊びじゃないんだよ。それに変な奴らも絡んでるんだ」

「私、以前花絵さんに働いていた店聞いたもん」

「どこだよ」

「だから、今から駅へ行くから待ってて」

妙に嬉しそうな声で話す久ちゃんは電話を切った。

佐木田はブツブツと怒っていた。

「何だよ、旅行じゃないって言ってんだろ。二人で行く意味なんかないのに」

それでも、大阪に行かないと花絵と正勝のことが心配だ。

佐木田は石上刑事に電話をした。さおりについて心配だから見てほしいということと、もう一つ聞きたいことがあった。

「石上だ」

「佐木田です」

「ああ、どうしたんだい」

「花絵さんの家にさおりが来て、正勝の上着を持ってきてるんだけど、銃で撃たれた穴があいてるんだ」

「うん？ 銃創？ わかった。住所は」

伝えると佐木田はさらにこう言った。

「寺田宝石店の祥子さんがいなくなっただけで、何か話を聞いてませんか」

「梓の近くの宝石店か？」

「そうです。旦那に奥さんを探すように頼まれてるんだけど」

「浮気か？ それとも金か？」

「そこですけど、ちょっと何か掴んでたら教えてもらえないかなと」「おいおい、こっちが便利屋じゃないんだから」

石上はそう言うが、決して怒ってはいないと分かる。このことを伝えておけば、きっと何かアンテナを広げてくれるに違いない。

「じゃ、お願いします。今日は梓に行きませんから」

「どこへ行くの」

「大阪へ、久ちゃんまで行くって」

「おお、それはそれは羨ましい。しつぽりと大阪の街へ」

「違いますよ、そんなのじゃないんです。花絵さんが以前働いていた店を知ってるのか」

石上はニヤニヤしているようで話を碌に聞かずに電話を切った。

「違うのになあ」

そう言いながらも佐木田は久ちゃんとしばらくデートしてないなと思った。

久ちゃんはぽつちやりしてるけど、なかなかのナイスボディだ。

佐木田は駅に行く前に栄養ドリンクを一本飲んだ。

「うまい！」

心なしか足が弾んでる。

「俺もまだ若いな」

だが、そんな佐木田の顔を寺田宝石店の店員が歩いていた。

あのときの手袋をはめていた人か。先日店に行った時のことを思い出した。

彼女はなかなか綺麗で、祥子よりこつちがいいのにと佐木田は勝手に思った。

彼女は栗色のボブにしている、二重の目がチャームポイントだと自分でも自覚しているような化粧をしていた。

彼女はふと後ろを何回か見るので、尾行されてないか警戒しているように見えた。

声を掛けるつもりだった佐木田は、少し興味を感じて彼女の後を追った。佐木田のことなど覚えてはいないだろう。

彼女の手には白い小さな紙袋と青いオーストリッチのバッグを提げていた。

若いのにあのオーストリッチを持っているということは、あの店の給料はかなりいいということか。

それとも、あの寺田と愛人関係なのか、そうは見えなかったが。

佐木田は彼女が銀座線に乗ると、隣の入り口から乗った。彼女はすぐに座った。佐木田は新聞を広げて、彼女の様子を見ていた。白い紙袋には寺田宝石店の文字があった。客に頼まれたのか、高い届け物かもしれない。少しがっかりして次の駅で下りようと思った。

すると、彼女は決心したかのようにその紙袋を持って隣の車両に向かった。

大きく息をした彼女の様子が奇異に見えた。

佐木田はそつと後をつけた。

彼女は隣の車両の入り口付近に立っている男に渡した。胸ポケットに白いハンカチが見えた。あれは合図なのか。今時白いハンカチを胸に入れてる男など電車で見たことはない。

佐木田は持っていたケータイで写真を撮った。

祥子の失踪にどこか接点があるかもしれないのだから。

佐木田は彼女を追うのを止めて、東京駅に向かった。

大阪へ行くことを忘れるところだった。

ホームでは久ちゃんが小さなボストンバッグを持って立っている。

「おいおい、本当に旅行気分かよ」

「遅いわよ、英ちゃん」

「だって、大阪久しぶりなんだもん」

「こっちはお仕事なの」

「いいじゃないの。旅行なんて初めてよ」

「だから、旅行じゃないって」

「意地悪」

思い切り腕をつねられた。

「いたたた」

そう言えば、これだけ仲が良くても旅行はしたことがなかった二人。

久ちゃんの手には駅弁があった。

「まあ、いいか」

久ちゃんは嬉しそうに腕を組んで一緒に乗った。佐木田は栄養ドリンクを飲んだことを思い出した。

「大阪の夜は暑いぞ」

佐木田の言葉をまるで疑わずに久ちゃんはいやだわと呟いた。

「私、ベビーパウダー忘れた」

「なんだよ、それ」

「アセモがすぐできるの」

佐木田はこの女のこんなところがいいなと思っていた。

第十章

佐木田は久ちゃんと新幹線に乗っていた。

駅弁を食べてビールを飲んで、佐木田は仕事を忘れてしまいそう
だと思った。

「英ちゃん、ビール、もう一本飲もうか」

「おいおい、大阪へ着くまでに出来上がったやうよ」

「いいじゃない、もう一本くらい」

「そうだな、じゃ、もう一本だけ」

駅弁の卵焼きを頬張りながら微笑む久ちゃんは可愛い。

鶏の照り焼きもうまい。

こんな二人の旅行なんて無いと思っていた。

佐木田は外の景色を眺めながら、花絵と正勝の二人が消えたこと
を考えていた。

弟思いの姉に、早くいい結果を報告してやりたいが、物事はそう
簡単には進まない。

久ちゃんは買った週刊誌を読みながら、しきりと話しかけてくる。
「ねえ、英ちゃん、ほら、この二人噂通りよ。ホテルに消えたんだ
って」

「そりゃ、若いんだもん。行くだろう」

素っ気ない返事しか出てこない。

「ほらほら、この人、この頃見ないと思っていたらラーメン店開い
たんだって」

「ふーん、芸能界よりそっちが売れると思うよ」

「私、結構この人好きだったのよ。いい男だし」

「そうか、足が短いぞ、この男」

「あら、英ちゃん妬いてるの」

「ふん、あり得ないね」

久ちゃんは拗ねて見せる。

まるで恋女房にでもなつたみたいだな。

佐木田は自分でもそんな錯覚に陥りそうな気がした。

結婚なんてするつもりはない。ああ、絶対にな。久ちゃんがどうのこうのではない。

久ちゃんは占いをしている。

「私射手座なの」

「ふーん、腹までは人間で腰からは馬か。だから嫌らしいんだな」

「もう、意地悪ね!」

そう言うのが怒ってはいない。

「英ちゃんは何座?」

「俺は車座」

「もう、そんな親父ギャグ言っでないで」

「俺はやぎ座だよ」

すると、久ちゃんは相性があんまりよくないと呟いている。

「そうだろ? そんな気がした」

「ホント? 相性悪いの?」

「ああ、よくないな」

「え? ホント? よくない?」

久ちゃんは心配そうに見つめる。

「ああ、だから今夜は眠れない」

そう言っで笑うと、久ちゃんはホツとしたように笑っでこう言っでた。

「今日は大阪のすっぱん料理食べよう」

そんな暇あるのかなのか、佐木田は少し眠ることにした。

いつの間にか久ちゃんの寝息が聞こえて目が覚めた。

「おい、もう新大阪に十分で着くぞ」

「え、もうなの」

久ちゃんは大きく伸びをした。佐木田は新大阪の夜のネオンに花絵も正勝もここにいるのかとふと思った。

久ちゃんは梅田の店だったと言いながら佐木田と並んで歩く。

佐木田はケータイを取り出してビジネスホテルを予約した。
シングルしかない。

「今日はツインはいっぱいだ」

「えーっ、そんな。一人は嫌だわ。ここにしよう」

目の前の大きなホテルを指さした。

「おい、そこは高いよ」

「いいの、英ちゃん、私旅行なんだからここに決めた。英ちゃんも泊まって」

「俺のカードじゃ足が出ちやいそうだよ」

「いいのよ、私が払うんだから」

「ちっ、カツコ悪いなあ」

「私がどうしても行くなって決めたんだから、私が払って当たり前よ」

久ちゃんはフロントへ行くとさっさとツインを頼んだ。なんと、
一人が一万八千五百円。

絶対に佐木田は泊まらない金額だ。

ボーイが二人の荷物を持って歩く。

ターコイズブルーの張り替えたばかりの匂いがする絨毯をあるく。
十四階だった。

久ちゃんはカーテンを開けてネオンを見つめた。

「花絵さん、ここにいるのよね。ここからだと近いわ」

「どっちだい」

久ちゃんの肩を抱きながらそう言つと、とろけるような声で佐木
田の耳元へ囁いた。

「一息入れてから行かない？」

久しぶりの彼女の唇は柔らかく、佐木田の舌が迫っていても動
じない。

ファスナーを下ろすと、黒いスリッパに黒いブラ、そして、タン
ガだった。

「おう、これはすごいなあ」

肩ひもをずらすと、簡単にスリッパが落ちた。ぽっちやりしてい

ても久ちゃんの体は男の掌には優しく吸いついてくるようだ。ブラもタンガも脱がす暇なく佐木田の舌が追う。

待ちかねているかのように佐木田の服を脱がそうと手を伸ばすが、触らせないように佐木田は手を押さえ、彼女の体に舌だけで応えていく。

「ああん、もういや」

「そうかい」

「意地悪なん、だ…から…」

体をうねらせる久ちゃんの熱い吐息。

服を脱いで立ち上がると、久ちゃんが傳く。二人の時間が緩やかに進む。

波がうねるように体が動く。

これほど女の体に溺れそうになるのは久しぶりのことだった。

「英ちゃん」

彼女の声が甘く、佐木田の耳を軽く噛みながら喘ぐ。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

佐木田は時計を見た。

「店が開いてるな」

「うん、行こうか」

「現金な女だな」

「帰ってから、またね」

「いや、もう仕事に没頭する！」

「またまた」

そんな甘ったるい時間を振り払うようにシャワーを浴びて着替えた。

久ちゃんは、しっかりと化粧をして新しいワンピースに着替えた。大阪のクラブに負けたくないっていうのか。

女とは分からないものだなと、佐木田は久ちゃんの耳に囁いた。

くすつと笑いながら「そうよ」と応える彼女は、夜のホステスの顔だった。

第十一章

寺田はあの日、朝から怒っていた。

母親がネコのミーコがいないと電話してきた。

「佐木田さんに頼んでちょうだい。ミーコがいらないの」

「わかった。連絡するから。今僕は忙しいんだから」

「そんなこと言っただって。車にでも轆かれたらどうしよう」

「大丈夫だって。母さん。佐木田さんにすぐ電話するから」

「私、佐木田さんの連絡先を書いた紙失くしちゃったの。それでね」

「じゃ、切るから」

母親はまだ何か言いたそうだったが、寺田はそれどころではないと思っていた。妻が昨日から帰ってこないのだった。

以前一泊した時は昔の同僚と飲んだということ、その女の人からも電話を貰った。だが、それだって本当の同僚かどうかは分からない。調べたこともない。そういうことを調べるということ自体男として失格だと思っていた。

母親よりも妻を取る男がそこにこだわるのもおかしい話だと思っ

が。
寺田は何か手掛かりになるものはないかと妻のクローゼットや鏡台を探してみた。これとっておかしくないものはない。ただ、通販の段ボールが中味も出さずにそのまま積みまれている。買うのが楽しくて、使うという事は目標ではないようだ。

金を使い過ぎるのも困るが、祥子は実に魅力的な女だから少々なことは目をつむるしかない。彼女と知り合ったのは結婚紹介所だ。

寺田はひと目で気に入ったのだが、彼女の方はたくさんの男が候補にあがったようだ。だが、自分を選んでくれたことで、寺田はすぐに結婚を申し込んだ。

派手な顔立ちの祥子は宝石がよく似合った。寺田は商売柄どうい

う女性がどういいうアクセサリを好むかよく知っていた。祥子はポ

リユームのある髪に肉感的な雰囲気から大きな石のアクセサリーがよく似合った。だが、祥子自身はそんなことより人が持つてないものを欲しがった。親戚も誰もいない結婚式だった。彼女は両親も兄弟もいないと言った。寺田の母親は息子がよければと周囲の心配も気にしなかった。

それなのに。祥子は母親を一方的に嫌った。母親は少しボケてはいるが、まだそれほど手のかかることは何もなかった。新婚の間は離れて暮らそうという息子の申し出にも寂しそうではあったが了解していた。

だが、母親は一人ぼっちになったからか、最近は何もをやらなかった。かわいがるようになった。

佐木田の経営するスリーエス事務所は高いとは思ったが、自分でネコを探しに行くことなど考えられなかった。寺田は、佐木田に頼むしかなかったのだ。

薬の抽斗の下には折り畳んだ紙があった。
息を飲んだ。

それは離婚届だった。

その頃、母親は佐木田が冷蔵庫に貼ってあったメモを見つけた。

「あら、ここに貼っておいてくれたのね。佐木田さんに電話しなくちゃ」

息子に電話したことなどすっかり忘れ、佐木田にネコ探しを依頼した。

佐木田はすぐに探しに行ってくれに違いない。ホツとして、ベッドに横になるとこの間、嫁の祥子が置いていった箱を取り出した。その菓子箱の中は薬がいっぱい入っていた。

「何の薬かね。家に置いてると叱られるって」

母親は自分の薬とは違う鮮やかな色に見入っていた。

祥子がこれを置いていったのは一週間ほど前のことだった。

「お母さん、病院の貰った美容の薬」

「私は今更美容なんていらナイよ」

「違うわよ、お母さん。高いから家に置いてあると彼が怒るの。お母さんのところに置かせて」

「そうかね、それほど高いのかね」

「そうよ、ほらお肌がつやつやでしょう」

母親は以前の方が祥子が綺麗だと思ったが、そのことは言わなかった。ただ、最近の祥子は痩せてきたので、以前よりさらに派手な服を着るようになった。

電話のそばにその箱を置くと、このことは秘密にしてねと笑いなから言った。

いつもはにこりもしない嫁の祥子が、そう言って笑ったのが寺田の母親には嬉しかった。

そして、ケータイに電話がかかると、祥子はなぜかこう言った。

「はい、ルーク薬品です」

「はい、お届けは十錠からです。畏まりました。えーと 公園のトイレの前です」

なんで、ルーク薬品なのかよく分からないが、母親はミーコの方が気になった。

祥子はその菓子箱から薬を取り出すと、また来るからと言って出ていった。

そんなことがあって、一週間。

また、ミーコがいない。

佐木田が捕まえて連れてきてくれた。

「はい、ミーコちゃんはいましたよ」

「ありがとうね、佐木田さん」

佐木田のやさしい笑顔にホツとしながら、祥子の薬や受け答えなどすっかり忘れていた。

第十二章

佐木田と久ちゃんは大阪のクラブ「REX」にいた。このクラブはかなり広く著名人も訪れるという。

店内はゴージャスな造りで入口のカトレアの香りで一瞬戸惑うほどだ。久ちゃんは興味津々でホステスたちの服装や着物をチェックしてる。

「ねえ、英ちゃん、あの子の着物高そうね。二百万はするわ」

「へえ、すごいなあ。あのお姉さんはシャネルだぜ」

「もう、本当に客からどれだけ搾り取るのかしら」

「人聞き悪いこと言うなよ」

男と女の二人が来るのは珍しいことだから、ママと思われる人は目が笑ってはいなかった。嗅覚の鋭い女性に違いない。

「いらっしやいませ」

「あ、どうも」

「初めての方ですね」

「ああ、東京の藤原さんに紹介されて」

さりげなく組長に貰っていた名刺を見せる。ママの表情が安心の色に変わる。流石の藤原さん、大阪でも威力があるらしい。

「さあ、こちらへどうぞ」

案内されたのは奥から二番目のボックス席。

こう言う時に使うのは寺田宝石店からの依頼の金。この際、どういふ風に金を使うかはスリーエス事務所の勝手なのだ。

「ビールと何かつまむもの」

「はい、畏まりました」

ママはシャネルのワンピースを着ているチイママと思われるホステスに話している。

彼女はにっこり笑いながらビールとチョコのセットを持ってきた。

「どうも、よろしくお願ひします。蘭です」

「ああ、こちらこそ」

久ちゃんは気取って会釈してる。彼女はそつのない感じで話をする。客あしらいの上手なホステスだ。話し方も上品で嫌味がない。

「まあ、蘭さんもどうぞ」

ビールを出すとボーイにグラスを頂戴と声を掛ける。

「そちらのお綺麗な方は」

「久子です。この人に大阪へ遊びに連れてきてもらったの」

さりげなく佐木田の女という雰囲気を出す久ちゃん。好きにしたらいいよと佐木田は笑ってる。

「あら、いいですねえ」

蘭は本当に羨ましそうに言った。きつと惚れてる男がいるのだろう。久ちゃんが同じ仕事だと理解すると彼女はほぐれて来たように滑らかに話しました。

ビールを二本飲むと、ブランデーに変えた。

「ところで、このクラブにすみれって子働いていたでしょう」

久ちゃんが切りだす。蘭は思い出すように少し小首をかしげている。

「ああ、おとなしい感じの子だったあの子かな」

「ええ、多分そうよ」

「弟がいたわね」

「ええ、弟に手を焼いていたから。私は今すみれと同じところで働いているの」

「まあ、そうなの。そう言えば見かけたわよ。昨日」

「どこで」

佐木田は思わず身を乗り出した。でも、その様子に蘭は少し怪しむような目にならった。

「あなた、警察？」

「いや、やくざな探偵」

名刺を取り出して見せる佐木田。蘭は小さな声で話しました。

「このオーナーがもう一軒持ってるのよ、お店」

蘭は煙草を吸ってもいいかと聞く。二人で頷く。どうも何かありそうだ。

「その店に入って行くのを見たのよ。でも、あの子がすみれかどうか、はつきりしないけど多分そうだと思うの」

佐木田は三人が話しこむのはまずいと思って、フルーツを頼む。

ママはこっちの席を気にしながらも、次々と注文するので悪い気はしないようだ。

久ちゃんは上手に彼女の話を引き出していく。

「その店ってどこにあるの」

「ミナミよ。マッチ持ってるわ」

そこはエデンという店だった。

「マーちゃんのこと何か聞いている?」

「ああ、弟ね」

「困った子よ。お姉さん子なのに、心配ばかりかけて。男前なのよね」

「会ったことあるの?」

「今はないけど、昔はよく来てたわ」

「この高い店に?」

「ううん、私のマンション」

「えっ?」

聞くとところによると正勝と蘭の弟が同じ中華料理店で働いていたのだという。蘭は弟と一時共に住んでいたので、正勝も遊びに来たようだ。

「あなたの弟さんは今どこに?」

「さあね、全然連絡してこないから。店も知らない間にやめちゃって」

ママが蘭を呼びに来た。蘭の御贔屓さんが来たらしい。蘭はではまたねと言うと席を立った。彼女の客は太ったどこかの社長のようで、座るなり彼女の耳にキスをした。

「いやだあ、社長ったら」

そう言いながら、ボトルを注文させる蘭。

二人で店を後にした。

久ちゃんは会計に目をくるくるさせていたが、佐木田は札を惜しみなく使った。全部で九万だった。寺田宝石店になんて言おうかと領収書を貰った佐木田だった。

「ねえ、英ちゃん。このクラブ行く？」

「ああ、だが、ここは男だけの方がいいな」

「じゃ、私ホテルにいるから」

「送らなくてもいいか？」

「平気よ」

久ちゃんは耳元で待つてると囁いた。

「ムリ」

「意地悪。そうね、英ちゃんは若くないもんね」

悪戯っぽく笑うとホテルへ向かって歩いていった。

佐木田はマツチをポケットから取り出した。

黒地に赤い文字。

本当に樂園なのか。

エデン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0130x/>

スモーククォーツ

2011年10月12日11時13分発行